

① 奥尻島おくしりとう（北海道奥尻町）——北海道奥尻高等学校

町立化と離島留学で 魅力的な高校に

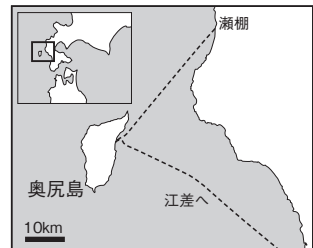
奥尻町地域政策課 政策推進係長 干場 洋介

●町立化で高校存続の主導権を地元へ

奥尻高等学校は、昭和五〇年四月に北海道立江差高等学校の奥尻分校として開校し、二年後の同五二年四月、道立奥尻高等学校（以下、「奥尻高校」としてスタートしました。

当初は一学年二クラスだった奥尻高校も、平成一四年四月から、一問口まぐち（二学年一学級）校となり、現在、全校生徒は四〇名にまで減少しています。このままでは、島唯一の高校が統廃合によりなくなってしまうだけではなく、中学校を卒業し島外の高校へ進学すると同時に、家族ごと引っ越ししてしまい、過疎に拍車がかかるのではないかとという危機感を町は抱きました。実際、北海道内では、生徒数の減少による高等学校の教室数の削減や統廃合が行われています。

町では、北海道教育委員会に対して、奥尻高校の町立移管を提案しました。同時に、保護者のみならず、住民に対しても説明会を重ねてきました。それは、大半の住民に「離島だから、生徒が少なくなっても高校がなくなることは



奥尻島：面積142.97km²。人口2,807人（平成28年11月1日現在）。北海道南西部に位置し、気候は比較的温暖。奥尻ワイナリーは、ブドウの栽培からワイン醸造まですべてを島内で完結する。毎年6月に奥尻ムーンライトマラソンを開催。



町立高校として新たなスタートを切った奥尻高校。29年度は中学校が敷地内に移転し、連携型中高一貫教育が実施される。

ない」という認識があったからです。町としては、学校の存続を北海道に委ねるのではなく、地元が主導権を持ちたいと考え、平成二八年四月に町立高校として新たな出発をすることになりました。二九年度からは、町内に二つある中学校を統合し、奥尻高校の敷地内に新校舎を建設、連携型の中高一貫教育を実施していきます。

●総合的な学習「スキューバダイビング」と「奥尻パブリシティ」

奥尻高校は、全日制普通科高校であり、通常の授業やクラブ活動も盛んですが、特徴的な取り組みもいくつかあります。

まず、総合的な学習の一環で「スキューバダイビング」と「奥尻パブリシティ」を実施し、生徒はどちらかを選択することになっています。

スキューバダイビングは、三年間をかけて段階的に初級から上級へと上がっていき、八月には学習の成果としてファンダイビングを行い、終了後にはバーベキューを囲みながら振り返りをします。初心者でも二年間でスキューバの基本的な資格であるオープンウォーター

ター・ダイバー（Cカード）の取得が可能で、さらに、上位資格（アドヴァンスト・オープン・ウォーター・ダイバー）の取得もできます。また、国家資格である潜水士の資格に挑戦することもできます。

奥尻パブリシティは、



スキューバダイビングはこの島の学校ならではの取り組み。ライセンスも取得できる。

奥尻島が抱えるさまざまな現代的な課題を探索し、解決を図り、広報（提言）を通して、地域の発展を主体的に担っていこうという活動です。効率的に探究と解決を進めるため、組織体制づくりからはじめ、役割分担を決めます。どのような組織体制ならば効率的に活動を進めていくことができるのか、奥尻島の課題にはどのようなものがあるのか、それをどのように解消していくのかを追求し、最終的に、奥尻島外へ向けた提言を行います。

●鳥がまるごと学校「まなびじま奥尻プロジェクト」

総合的な学習のほか、「まなびじま奥尻プロジェクト」として、「町おこしワークショップ」「イングリッシュサルーン」「Wi-Fi（ワイファイ）コーナー」「北の巖流島プロジェクト」などの取り組みを行っています。

①町おこしワークショップ

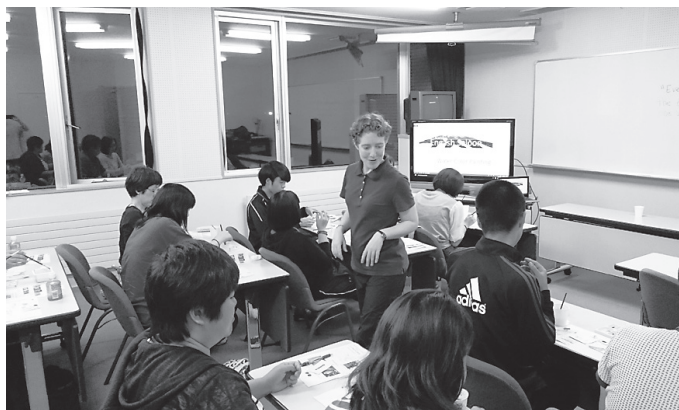
昼休みの一五分を利用して、島内のさまざまなエキスパートを招き、講話をいただき、意見交換をすることによって、現代で必要とされる課題解決能力の向上や、新しいことに対して臆せず挑戦することができる人材を育てています。

②イングリッシュサルーン

学校外で、さまざまなテーマに基づき、町の人も巻き込みながら、九〇分間、英語のみでディスカッションを行います。英語に対する後ろ向きな気持ちを払拭し、積極的に英語でコミュニケーションする力を養います。希望者のみですが、町の住民と高校生が英語を使って交流をすることができる活動です。

③Wi-Fiコーナー

町内に塾や予備校が存在しないということ



イングリッシュサルーンでは高校生同士のみならず、町の住民とも英語を使って交流をすることができる。

から、インターネットを活用した遠隔指導を実現することで教育の機会均等を図っています。難関大学に在学している大学生（お兄ちゃん、お姉ちゃん）に遠隔個別指導を依頼し、実施してもらっています。この活動により、受験勉強の進め方を現役大学生から直接教えてもらうことができ、勉強

に対するモチベーションの向上につなげることができます。離島にいながらにして、最新の情報のみならず、人々からの厚い支援を得ることができます。

④北の巖流島プロジェクト

これまで部活動で他校と練習試合を行うときには、奥尻島から出ることがほとんどでしたが、他校のチームやコーチをしてくれる大学生に奥尻島に来ていただき、質の高い合同練習やクリニックを行う取り組みです。

これら、離島という条件不利地域であることをものともしない数々の活動は、他校にはない取り組みなのではないでしょうか。

● 隠岐島前高校の取り組みを参考にした「離島留学」

奥尻高校は定員割れの状況が数年続いています。道立校から町立校となっても、生徒数の減少という現実は変わりありません。そこで道内のみならず、広く全国から生徒を募集する、高校生「離島留学」を始めることになりました。離島という環境を逆手に取った取り組みは、島根県立隠岐島前高等学校で全国に先駆けて行われており、奥尻高校でも実際に視察、取材をし、取り組みの参考としました。

島外からの生徒の住まいとして、寄宿舎がありませんので、職員をはじめ地元有志で「島の房暖ロッジ取次団」(教育委員会事務局内)を組織し、地元の民宿・旅館にお願いをして下宿を用意しました。また、下宿代のうち一万円補助、生徒の帰省の際の実費の半額補助(上限三万円、年四回)をするなど、島外からの生徒を一人受け入れるのに、年間およそ七〇万円を支援し、学校と町や地域が一丸となって、若い世代から町の活性化を図ろうと取り組んでいます。

● 期待したい島で育てた卒業生の活躍

まなびじま奥尻プロジェクトは、今年度から始まった取り組みであり、また、離島留学は来年度から始まるということもあり、どれくらいの子が入学するのか、蓋を開けてみなくてはわからない部分もありますが、留学生が地元

生徒にとって良い刺激となり、留学生自身や保護者が島のリーダーとなってくれることにも期待をしています。

筆者も奥尻高校の町おこしワークショップで教壇に立つ機会をいただきましたが、生徒一人一人が真剣に話を聞き、議論を交わし、提案を積極的に行っていた姿がとても印象的でした。

さまざまな取り組みを通して、奥尻島への愛着や、誇りを持ってほしいと思っています。島から巣立ち、社会へ出て、やがて奥尻島を支え得る人間に育ってほしい。一方で、日本のみならず、世界でも活躍する人がこの中から生まれることもまた、「奥尻島の誇り」につながると考えています。

奥尻高校が存続していく上で、町立学校にしてよかったと保護者や地域住民が感じること、欠かせない要素だと思います。保護者、地域住民の理解のもとに、継続されるべきだと考えるからです。町からの補助など金銭面のメリットという物差しで感じてもらうのではなく、奥尻高校の取り組み、現役生や卒業生の活躍を通して感じられるべきだと思っています。

私たちは過疎という厳しい現実を悲観的に捉えることなく、金の卵を奥尻島で育てるんだという気概を持って、この取り組みを今後も発信し続けたいと考えています。

干場洋介(ほしは ようすけ)
昭和53年奥尻町生まれ。
平成13年奥尻町役場採用、
同26年より現職。